〈報告〉

(1) 第１回英語教育研究大会（1990年10月27日）
(2) 連続公開講演会　　（1990年12月7, 13, 14, 15日）

伊藤　克敏

本年度の新しいプロジェクトとして、上記二つの会が催された。

(1)は県下中高英語教育研究部会の協賛も得、約100名の参加者があり、熱気溢れる大会となった。

先ず、筆者による「コミュニケーション能力を高める指導のあり方」、次いでＲ.ザブスラック専任講師による「Some New Ideas on Classroom Activities」と題する二つの講演がなされた。前者は日米伝達方略の相違を比較し、その指導法について述べた。後者は連想を利用し、語彙や表現力を伸ばすゲームの仕方を披露した。「中学校、高等学校、大学の英語教育の問題点」と題するシンポジウムでは、先ず松山正男氏（神奈川大学）が大学英語教育学会の調査を踏まえ、大学英語の選択化、入試廃止の必要性、教員の海外研修、クラスサイズの縮小等についての提案をした。松井弘氏（横浜市立瀬谷中学校）は英語教師ができるだけ英語を使い、生徒の言語経験を豊かにする必要性を説いた。馬守正夫氏（横浜市立港南中学校）はＡＥＴとの team teaching を活用し、場面に基づいた対話練習の仕方を紹介した。臼井良雄氏(県立保土ヶ谷高校）は日本文化や民族性について教科書でもっと扱う必要性、また、教師の海外研修の重要性を力説した。小嶋勲夫氏（県立有馬高校）はＡＥＴを topic writing, free writing, 等 'pleasure writing' に活用すべきである、と主張した。

(2)では12月７日㈮午後、Joseph F. kess 教授（カナダ、ヴィクトリア大学）による「The Developing History of Psycholinguistics」,「Ambiguity in Natural Language」という二つの講演が行われた。先ず、言語学史の発展を比喩を用いて三つの時期に分けて説明し、続いて、心理言語学の発展を四つの時期に区分けした。1951～59年までの「形成期」を行動主義と特徴づけた。次いで、「言語期」では変形生成文法によることばの規則性と生成、言語の生得性等が中心課題となっており、「認知期」「認知科学」と進む。最近では言語と認知の関係が焦点化して来ている、としている。続く「自然英語の曖昧性」についての講演では、単語、文法、比喩レベルの曖昧性を指摘し、後半でその応用として、広告における曖昧性の利用について多くの実例を挙げ、興味深い話がなされた。

Craig Chaudron 博士の三日間にわたる連続講演は、夕方６時から８時までという時間帯で、外部からも多くの聴講者があり、活発な質問や議論が展開された。

ハワイ大学の第二言語研究班は、1960年代から注目されて来たクラッシェン（S. Krashen）の「入力仮説」(Input Hypothesis）に批判的な目を向け、教室内での活動のあり方と研究方法について、新しい知見を発表しつつある。クラッシェン理論の批判として、(1) output practice の効用性、(2)文法項目習得順序、(3)文法的説明の効果、(4)誤用訂正のあり方、等が挙げられる。(1)では特に、writing による文法能力錬磨の必要性を強調している。(2)では、input frequency や年令による変化もみられ、今後の研究課題である、とする。(3)では、言い換えとか同意語、反意語の提示、例文の活用等による説明は効果的である、とし、(4)では、誤用訂正もやり方によっては効果を発揮する、としている。